結語

本論稿は、独立から20世紀はじめまでのアルゼンチンの言説空間を、「接触領域」としてとらえなおす試みである。接触領域とは、プラットの定義するところによれば、「しばしば支配／従属のきわめて非対照的な諸関係のなかで、まったく異なる複数の文化が出会い、衝突し、たがいをつかみあう社会的な諸空間」である(1)。ここでは、この概念をもっぱら言説のレヴェルで扱い、男性クリオージョ知識人や男性イギリス人旅行者、男性科学者のテクストなどを分析対象に、文化的な表象の自己領有の過程のなかで、もろもろの表象がどのように織りこまれ、重ねあわせられてきたかを明らかにしてきた。そうすることをつうじて、これまであたかも自明であるかのように論じられてきた、国民主義的同一性の古層としての〈土着文化〉、あるいは、あるひとつの社会にとっては外在的とされてきた〈移民文化〉、魅惑的であると同時に近代的な病いの場として位置づけられてきた〈都市文化〉といった従来の文化論的な枠組みを疑問に付している。

近年になって、とりわけポストコロニアル批評のなかでは、こうした表象の文化間ダイナミクスを論じる企てが積極的になされてきている。しかしながら、表象の文化間ダイナミクスに注視する分析においても、ヨーロッパ人のであれ現地の支配層のであれ、支配的な言説が一元的に拡大していくといった論のたてかたを、暗黙のうちに受け入れてしまう傾向があるように見受けられる。本論稿は、そのような論のたてかたを脱構築するあらたなテクスト読解の可能性を提示する試みでもある。これを、支配的な言説に寄与するテクストに書きこまれている反―規範的なもの、すなわち〈法外なもの〉に着目し、それを回復する企てといいかえてもよい。

しかしながら、民衆の声や身振りといった〈法外なもの〉の回復につとめるあまり、民衆の集合的な意志表示をテクストのなかに見いだそうとしたり、あるいはテクスト外的な歴史的できごとと容易に結びつけ、また民衆反乱のようにきわだった歴史的なできごとのみに注目する傾向もある。そういった分析は、ともすると、晦渋な用語や概念を用いていながら、結局のところ従来おこなわれてきた民衆史の焼きなおしにかぎりなく近似なものとなってしまう。〈法外なもの〉の真の像を描いたり代弁したいと欲望したとたんに、〈法外なもの〉の法外性は消去されてしまい、ふたたび民衆文化なりネイティヴの文化といった表象の上塗りをすることになる。〈ネイティヴ〉や〈民衆〉を歪曲するのも神聖化するのも、行為の質は同じだということが忘れられてしまいがちである。

フェミニズムの文化批評家レイ・チョウ Rey Chow がいっているように、「ネイティヴは、歪められたイメージではなく、しかしまた歪められたイメージではないわけでもない。そして彼女は、想像上の類似にとらわれたわたしたち、自分こそは騙されないと思う自己欺瞞にとらわれたわたしたちをあざ笑いながら、無関心に見つめかえすのである」(2)。〈ネイティヴ〉であれ〈移民〉であれ、かれらの「無関心」なその眼差しを一瞬とらえることをおいてほかに――すなわち、その「無関心」な眼差しが支配的な言説をたじろがせる瞬間をつうじてそれをとらえることをおいてほかに、〈法外なもの〉を回復する手だてはない。本稿では、こうしたスタンスのもとに、論を展開してきた。

じつは本稿で扱わなかったものとして、チョウが扱っているフェミニズムやジェンダー論があるという点を最後に指摘しておきたい。本論稿のテーマと関連するフェミニズム的、ないしジェンダー論からの分析については、すでにプラットが『帝国の眼差し』のなかで断片的に触れているほか、彼女の別の論稿でも分析が試みられている(3)。より包括的な研究としては、フランシーヌ・マシエリョ Francine Masiello が、「ネイションを・散種する」"DissemiNation" のなかでバーバがとった支配的な言説の脱構築の手法を援用しながら、アルゼンチンの男性クリオージョ知識人の支配的言説に亀裂を入れるものとして、女性のテクストを分析し、興味深い議論を展開している(4)。本稿で論じてきたテーマと深くかかわるにもかかわらず、ジェンダー論にかかわる視点を入れることができなかった点は、今後の課題としたい。